

# 14 学 校 保 健

## 豊かな感性を育む保健室での指導

### — 保健室における相談活動の実践 —

吉 兼 亜 紀 子

#### 1. はじめに

保健室の機能が今や救急処置のみにとどまらず、精神的な援助を求めて来室する児童の対応に追われるようになって久しい。

そこで、これまで実践してきたことを振り返り、自分の健康状態について気づき、自らの生活を振り返り、また怪我に対しての判断力をつけるためにはどのような支援が必要であるのかを考察してみたい。

#### 2. 本校の児童の様子

通学範囲が広く公共の機関を利用して通学している児童が90%以上であり、そのため通学時間が長い児童も多い。また、6年生のほぼ全員が国・私立の中学校を受験するため、運動会が終わった10月頃から、急速に睡眠不足による頭痛や倦怠感を訴えて来室する児童が増える。他学年においても受験に向けて塾や習い事に通い、夜遅くまで起きている児童が多いためか、同じような姿が多く見られる。その他に、小さな怪我や少しの痛みでも保健室に来室し、怪我の処置をしてもすぐにまた痛いと感じ再び来室し、いつ痛みが治まるのか、どれくらいしたら治るのかなど、結果がすぐでないとなかなか納得しないという傾向もある。そのため、保健室はいつもたくさんの児童でにぎわう。そういった意味でも本校児童は精神的に弱いのではないかと感じる事が度々ある。

#### 3. これまでの支援の経過

先に述べたように、本校児童の保健室の来室頻度は非常に高い。そういった意味でも、日常生活を振り返って見て、保健室という空間が、子ども達にとって、どのような役割を果たすのか。また、果たすべきなのか。そして、児童とのコミュニケーションをどのように図っていき、子どもとの人間関係をどのように位置づけていくか思案した。ところが、忙しさのあまり、子どもの話をきちんと聞かずに処置だけして帰したり、それくらい大丈夫と言って帰したり、児童の立場にたって考えたり、支援ができていない場面が多く見られた。しかし、小さな怪我や少しの痛みで来室する児童を前にして見て、児童自身の、精神的強さ・我慢強さを養う必要があるのではないかと感じ、また、保健室に来室する児童にとって保健室での処置が本当に必要かどうかを判断する私自身の力の必要性を強く感じた。

#### 4. 保健室における相談活動の手立てについて

保健室に来室する子どもは実に多種多様で、精神的に弱いのではないかと感じる事の中に、児童自身、話を聞いてもらえる人がいなかったり、逃げ場のないどうしようも出来ない気持ちがあったり、欲求を解消出来なかったりということにより、保健室に来室するのではないかとと思われる。そこで、保健室における養護教諭の手立てとして、以下の研究仮説を立てた。

- |                                       |
|---------------------------------------|
| ア 一人一人の性格や、現在の状況などを素早く察知する。           |
| イ 日頃から担任との連絡や情報交換を怠らない。               |
| ウ 来室する児童の顔色や、入って来た時の様子、態度、話し方などに着目する。 |

## 【実践事例】

### 児童Aさんの場合

家族構成：両親は、Aさんが次学年に進級する直前の春休みに離婚したため、母親と2人暮らし。

性 格：他に兄弟もなく、母親の友人の家などに、招かれることが多く、大人との付き合いが多いため、ものの考えかたが大人びているように感じられる。また、きれい好きではあるが、めんどくさがり屋でもある。物事に対しても、自分が気に入ればとことんやるが、気に入らなかつたり、うまくいかないと、投げやりになる面も見られる。しかし、絵を描いたり、本を読んだりすることが好きで、クイズなどを考えて帰りの会などで、発表したりもする。

友人関係：自分から友達を増やそうとするよりも、仲の良いBさんと行動することが多く、Bさんの友達と一緒に話したり、鬼ごっこをしたりする。

#### (1) これまでのAさんの生活について

両親が離婚後、母親が勤めに出るようになり、母親が家に不在の場合が多く、家族間でのコミュニケーションが大変少ない。Aさんが学校から帰宅する時には母親は仕事に出るため、夕食も1人で食べ、母親が帰るまで布団の中で待っていたりするため、就寝時刻が遅くなり、朝起きれないという状況があった。そのため、遅刻も多く、朝食も満足に取らないで登校していた。また、5月の連休明けに3日ほど続けて休んだ事があるのだが、この時、家は出るのだが、登校していなかったという事がある。

#### (2) Aさんにかかわる支援について

10月13日（水）10：45

頭痛を訴えて来室。この日を境に、Aさんは毎日頭痛を訴えて来室するようになる。それでも、休憩時間はたくさんの児童でにぎわうため、度々来室するAさんに対して、私自身の中で「また来たの。」という思いが募った。そんな、気持ちからか、Aさんに対する言葉掛けや態度が十分でなく、自然とAさんを保健室から遠ざけてしまった。

11月22日（月）10：35

約1カ月後、気分不良を訴えて来室。再び、頭痛を訴えて保健室に来室するようになる。

それまで、保健室の机の位置が入り口に向かって、背中を向けるようになっており、加えて、児童の処置を行うソファに向かって横向きであったため、児童が保健室に入りやすい空間作りと、処置をするとき顔を見て話せるようにとの思いから模様替えをしていた。その時、保健室に入ってくる児童が「どうして机の位置を変えたん？」と聞くので、「みんなの顔がよう見えるように変えたんよ」と話すと「ふーん」という返事が多かった。(中には前のほうがよかったねと言う児童もいたが……)しかし、Aさんは他の誰よりも机の位置が変わったことをソファに座りピョンピョンはねて喜んでくれた。この時、Aさんの話をしっかり聞き取り、少しずつでいいから、基本的な生活習慣が身につくよう心掛け、支援していこうと強く感じた。

11月24日（水）8：40

前日が休日だったためか、朝からたくさんの児童が来室。遅刻をしてきたAさんが頭痛を訴えて来室。検温をすると、36.4度と平熱であったが、昨日はどんなことをして過ごしたのか、Aさんの体調不良の原因を一緒に考えた。「今日はどうして、遅刻してきたの」と尋ねると、昨夜は、母親の友人宅での夕食に招待され、午後11時に帰宅し、お風呂に入って11時半に布団に入ったが眠れず、12時50分頃寝たという。「それじゃあ、朝起きれんねえ」と言い、起床時間を尋ねたところ、朝は7時に起床し、サラダを食べて登校してきたという。Aさんと話していて、ふと気が付いたのだが、歯に何か付いている。どうやら、朝食べてきたサラダのようである。

そこで「朝歯磨きしてきた？」と聞くと、「うん」と言う。「でも、歯に何か付いているよ」と言う。「うがいで済んだ」と答えた。「歯磨きせんかったら、小学生の間に全部の歯が入れ歯になっちゃうよ」と話すと、少し驚いていた。そして、「しんどくなったら、いつでも保健室においで」と言って、教室に帰した。

すると、10時55分、寒い寒いと連呼しながら来室。音楽の時間なのだが、オルガンの音がうるさくて頭が痛いし、今日はみんなが叫ぶので嫌だとも言う。しばらく、保健室にいて、4校時の授業に間に合うようにと送り出す。しかし、やっぱり気分が悪いと言う。そして、ポケットに手を入れて、「今日は、お医者さんからもらった薬の8個のうち5個持ってきて、もう全部飲んだ」と言う。「薬を飲むのにご飯を食べた後飲むとか決められているんじゃないの」と聞くと、「気分が悪かったらいつ飲んでもいいっていったよ」と言う。頓服薬らしいが、それでも昼前に5個は飲み過ぎであること。確かに薬には、病気に対するさまざまな効果があるが、副作用というものもあるということ。そして、薬の力だけでは、治らないこと。なぜなら、人間には他でもない病気を治そうという力を持っているからだということ話す。そして、再びAさんを教室へと送り出した。

それから、何日か頭痛を訴えては来室していたが、ある日、Aさんのクラスの児童が「Aさんがこんと、帰りの会が始まらんよ」と言いに来た。私は、今まで学習うんぬんというよりも、とにかくAさんの話を聞くことが大切で、そのことに徹することが必要と思っていたため、周りの児童に与えている影響というものを全く考えていなかった。クラスの児童がAさんがいないと始まらない、みんなが待っていると言うことを伝えに来たことにより、Aさんはもちろん、私自身も考えを改めなくてはいけないことに気が付き、保健室に来て授業に間に合うように言葉掛けをしていった。それから、Aさんはほとんど保健室に来室することはなかった。

1月12日（水）9:00

3学期が始まってすぐこの日、登校中バスに乗りしようとしたとき、バスの扉に頭をぶつけてしまったと来室。その頃のAさんはずっと体操服に着替えず制服のままで過ごしていた。着替えない理由は「体操服のサイズが小さいから」ということだったため、担任の先生が始業式に間に合うように注文していたのだが、それでも着替えない。担任もAさんの話を聞くことに徹していたが、その時は、着替えることの意義を話し、体操服に着替えさせた。そのとき、彼女はいつも髪の毛をきれいに編んで来ているため、それが乱れるのもいやだったようで、泣いてしまった。私がきれいに直してあげるからと言って、何とか着替えた。それからの彼女は、ふっきれたのか、今まで人に言われても着替えなかったのに、自分で着替えるようになった。そして、ほとんど遅刻をして来ていたのだが、以前に比べるとあまり遅刻をしなくなった。彼女が、どんどん変わって行く様子が手に取るように私にも分かった。そして、保健室に来て自分から時間を気にして行動するようになった。

彼女の変化の要因に、クラスの子どもたちが、帰りの会の「今日のヒーロー」と言うコーナーで、彼女のよいところをたくさん見つけて発表してくれたことがあげられる。また、以前は担任からの声掛けによって動いていた傾向が見られたのだが、しだいに友人からの励ましや声掛けによって行動を自分から起こすことが多くなった。例えば、彼女が掃除をしなくても、帰りの会で、発表しなかったのが、最近ではきちんと発表するようになった。そして、一番仲の良い友達の声掛けもあり、徐々にその友達との信頼関係が生まれ、彼女も逆に、その友達に声を掛けたり励ましたりと、学校の中で彼女が安心して生活できるような環境が整っていった。そして、彼女自身の中に頑張ったら出来るという自信もついて来ているようである。

また、5月の連休後のAさんの行動について、担任が家庭へ連絡すると、学校できちんとみ

てくれていなかったからだと言うようなことが返ってきたりしていた。それでも、担任が電話で話したり、時には学校へ来校してもらったりして、Aさんのよいところを見つけては話した。しだいに、母親の担任に対する態度や言葉遣いが変わって来て、少しずつ信頼関係が生まれて来たことも、Aさんが変わっていった要因の一つであると思われる。

## 5. 成果と課題

この実践を通して、Aさんだけでなく保健室に来室する子どもとの関わりにおいて、大切だと考えたことについて述べたい。

### ① 常に受容的な態度で接すること

例えば、小さな怪我1つとってみても、まずは「あー痛かったんだね。」と子どもの痛みを共感してやること。それから、「でも、これくらいの怪我だったら水道のお水で洗い流せばきれいになるから大丈夫よ。」と話せば、ほとんどの子どもは理解出来る。そして、どの程度の怪我だったら保健室へ行くのかということをも身に付けていくことが大切である。しかし、本校児童のように来室頻度が高いと、つい「これくらい大丈夫よ」と言ってしまうことが多い。そのため、保健室だけでこれらを実践していくことは非常に難しい。そのためにも、担任との連携を密にして、ほけんだよりなどで、児童や保護者に啓発していくことが、重要であると思われる。

### ② いつでも子どもを受け入れられる保健室であること

何度も保健室に来室する児童がいるが、その時に大切なことが、「また来たのか。」と思わないことである。この実践を通してそれを強く感じたのだが、児童は養護教諭の言葉掛けや態度を敏感に感じ取っている。痛いと言って来室してきた児童に、ただ大丈夫とか、それくらい頑張りなさいというのでは何も解決できない。まず、児童の気持ちを受け入れ、それによって、その児童が甘えていると感じれば、それは甘えであるということを感じさせることが保健室における感性を育むということになるであろう。

### ③ 養護教諭自身の感性を磨くこと

養護教諭自身の感性も磨いていかなければ、児童を本当に理解し、支援していくことは難しい。なぜなら、養護教諭のものの見方や考え方一つで児童の成長や発達を支援することもできれば、逆に見過ごすことにもなる。すなわち、養護教諭自身が児童に自分の体や精神を鍛えなければならぬと感じていけば、児童にその必要性を感じさせることができ、健康な体作りをするためには、どんなことをしていけばよいのかという、感性を働かせることができるが、必要性を感じていなければ、児童に気づかせることができないのである。

今回の実践を通して、私自身さまざまな葛藤があった。児童をどこまで受け入れるべきなのか、また、それが児童の甘えになっていないだろうかと考えた。しかし、今回の実践を整理していくうちに、私が養護教諭としてしなければならないことは、児童に自分自身の健康状態について振り返らせ、そのことによって今自分に何が必要なのか、どうしなければならないかという場面を作ることであると思う。そのことにより、児童の感性が磨かれると思われる。